

源氏物語諸伝本の国語史学的一考察

東 辻 保 和

はじめに

源氏物語の最も信頼すべき一証本が、青表紙本系飛鳥井雅康筆大島本であることは、池田龜鑑博士によって明らかにされたところである¹。『源氏物語大成校異篇』には、大島本を主底本とし、他の青表紙本、河内本、別本との校異が詳細に掲げられており、それは尠大な量に上っている。一つ一つの異文が、いかなる過程を経て生れたかは、容易に知り難い。また、青表紙本および河内本の性格については、古くから多くの研究が有るが、別本に至っては、明らかでないところが多い。

言うまでもなく、源氏物語の伝本は、平安時代中期の言語で書かれた原源氏物語を転写することに発したものであり、幾多の転写の過程で、異本が生じようと、それは、やはり源氏物語の一異本なのであって、仮令、それが、中世に書写されたものであっても、直ち

に中世語の資料と成り得るものではないことは、勿論である。しかしながら、他方、中世の転写本には、いかにもそれらしい言語相を含んでいることが有っても、不思議ではないように思われる。いかに忠実なる転写を意図しても、書写者の言語を支配する言語環境の影響が、無意識の間に作用し、結果的に忠実な書写たり得ていない場合の有ることが、予測されるからである。

そのような目で見れば、別本にも、それ自ら語っているところが有りはしないか、と考えられてくる。小稿では、若干の語詞・語法を通じて、その点を探ってみようと思うのである。

一 「奉る」(下二段活用)

四段活用の「奉る」(以下「奉り」と称する)とは別に、下二段活用の「奉る」(以下「奉れ」と称する)が平安時代に行われ、一

○世紀末から一一世紀初頭が最も盛んであったと考えられている²。
一例を挙げれば、左のとおりである。

○九日にそま^り給。右の大殿、御くるま、御せんの人々、あまた
たてまつり給へり。北のかたも、うらめしと思きこえたまへと、
としころさもあらさりしに、この御ことゆへ、しけう、きこえか
よひたまへるを、又かきたえんもうたてあれは、かつけ物とも、
よき女のさうそくとも、あまたたてまつれ給へり。(竹河一四八
三)

井上親雄氏によれば、「奉り」は表向きのきちんとした贈りかた
をする、また、挨拶として儀礼的に贈る場合に用い、「奉れ」は「こ
まやかなる思いやりをこめてさし上げる」場合に用いられ、両者の
意味差は微妙なものであったという⁴。

さて、「奉れ」は、『源氏物語大成索引篇』によれば、六〇例を
数える。いま、そのすべてを『校異篇』に当ってみると、底本の「奉
れ」が他の伝本では「奉り」になっている例が少なからず見られ
る。たとえば、

○あさかほのこれかれにはひまつはれて、あるかなきかにさきて、
にはひもことにかはれるを、らせ給てたてまつれ給ふ。(朝顔
六四三—12)

右の例では、青表紙本の為家本、別本の陽明家本、伝二条為氏筆本
は「たてまつり」とあり、別本の国冬本では「たてまつらせ」とあ
る。

○わか御れうの心ことなるに、えならぬ御そともくして、御ともにも
たせてたてまつれ給。(藤裏葉一〇〇〇—10)

右の例では、河内本および別本は、すべて「たてまつり」となっ
ている。

このような異文は、青表紙本系統では、二二例について認められ、
河内本系統では、二〇例について認められるのであるが、これらに
ついては今触れず、別本に限って見て行くことにしたい。考察に
当っては、巻毎に異文の分布を調べる方法と、各異本別に異文の出
現状況を調べる方法とを用いてみる。

「奉れ」の現れる巻全体について見れば、別本は一八本(種)に
上るのであるが、巻毎について見れば、概ね数本ないし六、七本と
言ったところである。しかし、用例によっては、すべての別本が
「奉り」になっているものと、そうでないものとが有る。たとえば、

葵(三二六—5)、玉鬘(七四九—4、七五三—6、七五三—14)、
梅枝(九八八—11)、藤裏葉(一〇〇〇—10)

の諸例は、すべての別本が「奉り」となっている。(葵Ⅱ二本、玉
鬘Ⅱ五本、梅枝Ⅱ五本、藤裏葉Ⅱ五本) それに対して、紅梅(一
四五七—5)では、六本の中の五本、少女(六九五—1)、幻(一
四二—2)では、六本の中の三本、初音(七六五—1)、真木柱
(九六六—4)では、四本の中の二本が「奉り」となり、柏木(一
二二八—9)では、五本の中の一本、夕霧(一三五五—11)、夢浮
橋(二〇六二—8)では、六本の中の一本が「奉り」になっている

だけで、他の本は「奉れ」である。

このように、「奉り」の現れ方は区々であるが、巻毎に括って眺めてみると、そこに、ある程度の纏まりを見出すことができる。たとえば、玉鬘では、底本に四例の「奉れ」（七四五—4、七四九—4、七五三—6、七五三—14）が有る。当巻の別本は、保坂本、国冬本、陽明家本、麦生本、阿里莫本の五本である。したがって、合計二〇個所の「奉れ」相当例が有ることになるが、それを一々調べてみると、（七四五—4）の例が、国冬本、麦生本、阿里莫本で「たてまつれ」となっている以外の一七個所は、すべて「たてまつり」となっているのである。また、早藏では、四例の「奉れ」（二六八—9、一六八—12、一六八—9—2、一六九—14）が有る。別本は、保坂本、陽明家本、麦生本、阿里莫本、平瀬本の五本である。そこで、合計二〇個所の「奉れ」相当例について調べてみると、（一六八—9—2）の例が陽明家本、平瀬本で、（二六八—12、一六八—9—2）の例が平瀬本で、（一六九—14）の例が保坂本でそれぞれ「たてまつれ」であるほかは、一五個所すべて「たてまつり」である。また、梅枝では、二例の「奉れ」（九八八—10、九八八—11）が有り、別本は、保坂本、陽明家本、麦生本、阿里莫本、桃園文庫本の五本である。合計一〇個所の「奉れ」相当例について調べてみると、（九八八—10）の例が保坂本、陽明家本で「たてまつれ」であるほかは、八個所すべて「たてまつり」となっている。また、紅梅は一例（一四五—5）のみであるが、別本は、保坂本、国冬本、

麦生本、阿里莫本、飯島春敬氏藏本、平瀬本の六本が有り、そのうち、平瀬本が「たてまつれ」であるほかは、すべて「たてまつり」となっている。

右に見たように、「たてまつれ」が「たてまつり」に改変されたと思しい例の群がっている現象は、これを單純に偶然のしわざとばかりは言い切れないものが有るように思われる。ただし、かゝる現象が、「奉れ」の有るすべての巻の別本に見られるわけではないことに注意せねばならない。

たとえば、夕霧には「奉れ」が六例（一三〇—9—14、一三一—〇—5、一三三—6—4、一三四—5—1、一三五—5—11、一三七—1—8）有り、別本は、保坂本、国冬本、陽明家本、麦生本、阿里莫本、御物本の六本が有る。即ち、「奉れ」相当個所は三六個所である。これを調べてみると、一五個所は「たてまつれ」であり、二個所は「奉」のみであって、「たてまつれ」「たてまつり」いずれとも判断しがたい。したがって、明らかに「たてまつり」となっている例は、約半数の一九例にすぎない。また、竹河では、「奉れ」が四例（一四八—3—12、一四八—4—3、一四八—4—4、一四八—5—7）有り、別本は、保坂本、国冬本、麦生本、阿里莫本、大島氏藏伝西行筆本、静嘉堂文庫藏伝西行筆本、山科言経自筆書入本の七本が有る。即ち、「奉れ」相当個所は二八個所である。これを調べてみると、一四個所が「たてまつれ」であって、「たてまつり」となっているのは、やはり半数にすぎないのである。

巻毎に、「たてまつれ」が「たてまつり」に改められたと思われる例の分布を調べた結果は、以上のとおりであって、ここから統一的結論を導くことはむづかしい。そこで、角度を変えて、各別本それぞれについて、異文の出現率を調べてみることにしよう。底本の「奉れ」に対応する個所が別本で「奉り」になっている例数と、対応総数との比によって、異文の出現率を表すことにしたい。次表のとおりである。

	奉り	対応 総数	%
保	16	50	32.0
宮	3	8	37.5
国	14	27	51.9
陽	26	38	68.4
坂	1	1	100
讚	1	1	100
麦	24	34	70.6
阿	27	39	69.2
長	2	2	100
桃	5	9	55.6
御	8	9	88.9
飯	1	3	33.3
大	1	5	20.0
西	3	4	75.0
言	3	4	75.0
横	4	7	57.1
平	2	13	15.4
池	0	1	0

(略称は『大成』に準拠する。)

いま、対応総数が多くて、且出現率の高いものを順に並べると、次のとおりになる。

① 麦生本 ② 阿里莫本 ③ 陽明家本 ④ 国冬本

以下、対応総数は少いが出現率の高いものとしては、御物本などがある。

これらの諸本が、かかる高い改変率を持つ所以については、もとより軽々に論じ得ぬことではあるが、これらの転写行為の背後にある言語環境の変化、思い切って言えば、「奉れ」が、も早衰退して、書写者にとって、「奉り」との区別がつかなくなっていた、乃至は、なりつつあった、という事情が絡むのではないかと推察せられる。

そのような中であって、保坂本が、対応総数が最も多いにも拘らず、異文の出現率の低いのは、それだけ、転写が忠実に行われた流れを引くものであることを、示しているであろう⁵⁾。この点、平瀬本についても、同様のことが言えよう。

更に付け加えるならば、麦生本と阿里莫本とが、「奉り」「奉れ」の現れ方において、極めてよく一致している点に注目しておきたい。即ち、夢浮橋(二〇七〇―3)、玉鬘(七四五―4)、真木柱(九六六―4)、柏木(二二二八―9)、夕霧(二三五五―11)、竹河(一四八三―12、一四八四―3)は、両本が共に「たてまつれ」であり、夕霧(一三四五―1)は共に「奉」字のみである。横笛(一二七〇―5)では、麦生本が「たてまつれ」であるのに対して、阿里莫本が「たてまつり」であるという違いは有るが、両本の並存す

る他の例では、すべて共に「たてまつり」となっているのである。⁶

二 終止形と連体形

○十月一日ころあしるもおかしきほどならむと、そのおかしきこえ給て、もみち御らんすへく申給ふ。(総角一六三五―13)

右の用例「御らんすへく」が別本の横山本では「御らむするへく」となっている。⁷言うまでもなく、「べし」は終止形に接続するのであるから、横山本は破格と言ひ得る。このように、正しくは終止形であるべきところが連体形になっている例は他にもある。

○にはかにむねをやみてうせにきとなむきく。(橋姫一五四〇―5)
右の用例「き」が、河内本では、七本のうち平瀬本を除く六本が「し」となっている。平安朝文法では、格助詞「と」が引用を受ける場合は終止形に接続するのが正しいのであるから、河内本のように連体形「し」になっているのは、破格と言ひ得る。更に、

○へたつとはなけれど、あはあはしきやうならんは(菜上一〇六四―13)

が、阿里莫本では「へたつるとは」となっているものなども、同題の例と言ひ得よう。

底本で終止形終止になっているところが、異文では、連体形終止となっている例が少なからず見当る。「きこゆ」が「きこゆる」に変わった例が多いようである。

○いとおしく侍へきことゝはゝかりもなくきこゆ。(菜下一一九七―4)

の「きこゆ」が、別本の保坂本では「きこゆる」とある。以下、用例を列挙しておこう。

○そのことゝもきゝわかれぬものゝねとも、いとすけにきこゆ。(橋姫一五二一―3) ↓きこゆる(青表紙本系三条西家本)

○さうのことはあれになまめひたるこゑして、たえたえきこゆ。(橋姫一五二一―7) ↓きこゆる(別本保坂本)

○みやひかにゆへあるけはひして物などきこゆ。(橋姫一五三七―11) ↓きこゆる(別本横山本)

○むかし今をかきあつめかなしき御ものかたりともきこゆ。(推本一五六八―1) ↓きこゆる(青表紙本系前田本、池田本、肖柏本、三条西家本、河内本全、別本陽明家本、保坂本)

○この御さまはいとことになとめてきこゆ。(総角一六三一―1) ↓きこゆる(河内本国冬本、別本横山本)

このほかの三例(早蕨一六八三―2、蜻蛉一九八二―1、夜浮橋二〇七〇―2)は省略する。

○「みゆ」が「みゆる」に変わっている例が有る。

○くちおしのさまともや、とみゆ。(東屋一八三七―8) ↓みゆる(別本高松宮家本)

○「おはす」が「おはする」に変わっている例が有る。

○おとこはきはもなくきよらにをはず。(藤裏葉一〇一五―6) ↓

おはする（別本麦生本、阿里莫本）

「おぼゆ」が「おぼゆる」に交っている例がある。

○人やりならぬつれにくらしかたくおほゆ。（菓下一一八三—

3）↓おぼゆる（青表紙本系肖柏本）

「しらす」が「しらする」に交っている例がある。

○えいとかうまてはおはせぬわさそなと人々はきこえしらす。（早

蕨一六八三—1）↓しらする（別本陽明家本）

「おもほゆ」が「おもほゆる」に交っている例もある。

○しるの葉のをとにはをとりておもほゆ。（宿木一七二二—11）↓

おもほゆる（別本高松宮家本）

さて、これらの用例から、連体形が終止形終止法を兼ねた中世語法の現れ、と速断することは、慎まねばなるまい。というのは、所謂、余情を含む連体止めと解することも可能だからである。しかしながら、上に述べたように、格助詞「と」や助動詞「べし」の接続状況をも考え合せれば、このように連体形終止法が用いられたことは、その背後に、連体形が終止形の機能を侵すに至った、院政鎌倉期の言語環境の存在することを、物語っているように考えられるのである。渡辺実博士が次のように説いておられるのが参考になる。

「平安盛時の連体形終止法、『水流るる』のような余情を含んだ終止法と思われるものが、愛用、頻用の結果として余情の特性を失い、ために『水流る』のような終止形終止法と等価となり、ついに終止形終止法を滅亡させて、連体形がいれば終止形を兼ねるように

なる。」（『日本文法大辞典』△係り結び▽の項）

三 「もの」と「こと」

「もの」と「こと」とは、普通、対立的に用いられるのが常であるが、古くは相通じて用いられることも有ったことについては、先学の御指摘が有り、また、わたくしも触れたことがある。¹⁰

源氏物語の諸伝本を見比べて行くと、両者の入れ替っている例が少なからず目につくのである。まず、底本と河内本との間で見てゆくとにしよう。たとえば、

○けむしの大納言の御かほをふたつにうつしたらむやうにみえ給ふ。いとまはゆきまでひかりあひ給へるを世人めてたきものにき

こゆれと（濤標四八五—1）

○うへはよるつの事にすくれて、ゑをけうある物におほしたり。

（絵合五六—12）

○人として、心にもするわざにもたてゝなひくかたはかたとあるものなれば、おひいて給ふさまあらむかし。（常夏八四—6）などにおいて、「もの」が河内本では、すべて「こと」に成っているのである。右のほか、同趣の用例は、次のところにも見当る。

若紫（一六一—8）、薄雲（六二五—2）、若菜上（一〇五〇—14）、胡蝶（七九三—7）、夕霧（一三五二—5、三七四—14）、蛩（八〇六—12）、御法（一三八四—14、一三九—6）、柏木

(二二六一—6)、東屋(一八一四—11)

また、たとえば、

○ほとけのいとうるはしき心にて、ときをき給へる御法も、ほうへむといふ事ありて(螢八一七—14)

○大将さへ我をうらむなれ、すへてかゝることの心くるしさをみすくさて、あやなき人のうらみをふ(藤袴九三二—12)

○すてたる身には思ひなやむへきにはあらねと、かならずさしもやうのことゝあらそひ給はむもうたてあるへし。(夕霧一三五四—9)

などにおいて、「こと」は、河内本ではすべて「もの」に成つてゐるのである。右のほか、同趣の例は、次のところにも見当る。

少女(六七二—7、8、七〇八—6)、賢木(三六五—2)、紅葉賀(二三九—14)、胡蝶(七九〇—3)、明石(四五—14)、須磨(四二九—12)

このような現象は、底本と別本との間にも見当る。たとえば、○わかき人二三人あるはよにめてられ給ふ御ありさまを、ゆかしきものに思ひきこえて心けさうしあへり。(末摘花二二—10)

の「もの」は、御物本では「事」であり、○こなたかなたあきらめ申へかりけるものを、いまはいふかひなしや。(柏木一二四七—10)

の「ものをいまは」が、保坂本、国冬本では、「ことを」となつてゐるのである。右のほか、次のところにも同趣の例が見当る。

常夏(八四〇—11)、野分(八七四—8)、若菜上(二〇五〇—14)、柏木(二二六一—6)、夕霧(一三四〇—1、一三四七—6)、^{*}一三七四—14、一三五二—5)、御法(一三八四—14)、竹

河(二四八三—4)、榎本(一五七三—14)、総角(二六一—4、一六二五—13、一六四三—9、一六六四—4)、早蕨(二六八—7)、宿木(二七四八—11)、^{*}木印は、その例が河内本と同様であることを表す。以下同じ。

また、たとえば、

○まとのほたるをむつひ、えたの雪をならし給。心さしのすくれたるよしを、よろつのことによそへなすらへて(少女六七二—3)

の「こと」が、国冬本では「物」となっており、

○文籍にも家礼といふことあるへくや、なにかしのをしへもよくおほししるらむ(藤裏葉一〇〇二—3)

の「こと」は、国冬本では「ものは」となつてゐる。右のほか、次のところにも同趣の例が見当る。

須磨(四二九—12)、少女(六七二—7、七〇八—6)、胡蝶(七九〇—3)、^{*}螢(八一七—14)、^{*}若菜下(一一八一—5)、夕霧(一三五三—13、一三五四—9)、竹河(二四六七—6、一四九八—14)、榎本(一五七一—3)、総角(二六〇二—1、一六一七—8、9、一六三一—7)、東屋(一八〇三—14、一八〇九—14、一八二〇—4)、蜻蛉(二九四—6)、手習(二〇〇八—2)、夢浮橋(二〇六一—2、二〇六五—5)

次に、青表紙本系にも同趣の例が見当る。

○おやの御もてなしもえひとしからぬものなり。(薄雲六〇五―二)

の「もの」が、御物本では「事」になっている。その他、若菜上(一

〇三四―6 三條西家本、一〇三六―12 国冬本、一〇八七―3 国冬本)、

柏木(一二六一―6 横山本)にも有る。また、

○人のしのひかたくあかぬ事にする、もの思ひはなれぬ身にてやや

みなむとすらん(葉下一一六八―8)

の「こと」が、池田本では「物」になっている。

管見に入ったのは、以上がすべてである。源氏物語所用の「こと」

四八〇四例、「もの」一九四二例に比べれば、その数は微々たるも

のであり、また、いかなる意味条件のもとに両者が交替し得ている

のかも究明せねばならないのであるが、以上の交替例の存在するこ

と自体、初めに述べたごとく、「もの」と「こと」とが相通じて用

いられることが有ったという事実と、密接に関連しているのである

うと考えられる。

四 「あが君」と「わが君」

連体格「あが」「わが」の用例が平安時代の作品にどのくらい現

れているか、『古典対照語い表』によれば(万葉・方丈記・徒然草

を除く)、「わが」は九四二例有るのに対して、「あが」は二

二例にすぎない。且、「あが」の種類は、索引類によって見るの

に、

①あが君(宇津保、蜻蛉、和泉式部日記、源氏、枕冊子、狭衣、

夜の寢覚、落窪) ②あが仏(竹取、宇津保、源氏、狭衣) ③あが

君仏(宇津保) ④あが大將(源氏) ⑤あがおもと(源氏) ⑥あが

姫君(源氏)

この程度のものであって、「あが」の用いられることは、「わが

」に比べて、極めて少なかったと見てよいようである。また、「あ

が君」は、親愛感をもって対者に呼びかける時に主として用い、「わ

が君」より、やや敬意が劣る、とは、国語辞典はじめ諸注釈書の説

くところであって、「わが君」との間には、微妙な意味差が有った

ものと考えられる。源氏物語の「あがきみ」九例、「あがおもと」

二例、「あが大將」「あが姫君」各一例は、いずれも会話文に用い

られ、「あが仏」一例は手紙の用例である。親愛感をもって対者に

呼びかける、という通説に不都合は認められない。

さて、「あが君」九例のうち四例は、異本では「わが君」となっ

ている。即ち、

○あが君は、人わらはれにては、やみ給なむや。(東屋一八二九―

7、〔乳母↓浮舟〕)

河内本系伝慈覚筆前田家本「わか君」、別本御物本、陽明家本、

保坂本、池田本「わかきみ」

○あかきみ、かゝる御けしき、つるに人みたてまつりつへし。(浮

舟一九一八―13、〔右近↓浮舟〕) 青表紙本系横山本「わかき

み」、河内本系御物本「我君」

○おにかきも、あかきみをは、えりやうしたてまつらし。(蜻蛉一

九三四—10〔乳母↓浮舟〕) 青表紙本系三条西家本「わかき

み」、河内本系大島本および別本高松宮家本、陽明家本、国冬本

「わか君」

○あか君をとりたてまつりたらむ人にまれ、おに、まれ(同一九三

四—11〔同右〕) 青表紙本系肖柏本および別本陽明家本「わか

君」

となつてゐる。その他、

○あか大将をや。とてひかへ給へり。(横笛一二八一—12〔匂宮↓

夕霧〕) 河内本系御物本および別本保坂本「わか大将」

○あかおもとにこそおはしましたしけれ。(玉鬘七三四—3〔三条↓右

近〕) 別本陽明家本「我」、麦生本、阿里莫本「わが」

○あかおもと、はやくよきさまにみちひききこえ給へ。(玉鬘七三

九—4〔乳母↓右近〕) 別本陽明家本「我をもと」

など、「あが」の「わが」に変わつてゐる例が見当るのである。しか

るに一方において、逆に「わが」の「あが」に変わった例も有るので

ある。

○いととり申かたき事なれと、わかきみ、かうおほえなきせかいに、

かりにてもうつろひおはしましたるは(明石四五六—8〔明石入道

↓源氏〕)

この「わかきみ」が河内本系では、すべて「あか君」と変わつてゐる。

源氏物語に「わが君」は二例有り、右がその一例である。いま一

例は、

○わか君、はらまれおはしましたりし時より(薄雲六二〇—4〔僧

都↓冷泉帝〕)

であり、異文は無い。この二例は、会話の場面から推考するのに、

どちらも改まった感じの言葉遣いが期待されるところであり、「あ

が君」は、ふさわしくないように思われる。

以上のように、「あが」「わが」の用法が底本と異なるのは、背

後に、「あが」「わが」の意味の違いが時代と共に次第に明らかで

なくなつてゆくという事情が、はたらいいてゐるのではないかと推

量される。

五 「まだ」と「いまだ」

「まだ」は和文特有語、「いまだ」は訓読特有語であることは、

築島裕博士の説かれて以来、周知のところである。源氏物語には、

「まだ」が二九例用いられてゐるのに対して、「いまだ」は、次

の二例しか見当らない。

○あみた仏ものし給たうに、する事侍るころになむ。そやいまたつ

とめ侍らす。(若紫一六二—9〔僧都↓源氏〕)

○いまた、かたちはかへたまはずや。そくひしりとか、このわかき

人人のつけたなる。あはれなること也。(橋姫一五一—1〔冷

泉院↓阿闍梨)

右の話し手は、築島博士の言われる「特殊な人物」に該当するものと考えられる。¹²

さて、源氏物語の「まだ」を、異本と一々照合してゆくと、二六例について、「いまだ」に変わっているもの有ることに気が付く。次のとおりである。

末摘花(二二三―2、別本御物本)、少女(六九九―12、別本麦生本)、常夏(八三八―3、別本保坂本)、野分(八六八―9、別本麦生本、阿里莫本)、梅枝(九八九―4、別本桃園文庫本)、幻(二四〇七―1、青表紙本池田本)、竹河(一四七〇―10、青表紙本横山本、池田本、河内本)、竹河(一四九二―1、別本佐西行筆静嘉堂本)、橋姫(一五二―4、別本横山本)、総角(一六一四―11、別本横山本)、総角(一六二八―5、別本平瀬本)、宿木(二七八―14、青表紙本池田本、三条西家本)、東屋(二八〇五―12、別本池田本)、東屋(一八二五―7同上)、東屋(一八四六―2、青表紙本榊原本)、須磨(四一三―3、別本陽明家本)、胡蝶(七八―2、同上)、早蕨(二六八三―4、同上)、宿木(一七〇―1、同上)、宿木(二七〇九―10、同上)、宿木(二七二八―13、同上)、東屋(一八三三―3、同上)、蜻蛉(二九三―3、同上)、蜻蛉(二九三五―5、同上)、手習(二〇〇九―10、同上)、宿木(二七一九―14、同上、桃園文庫本)

一方、底本「いまだ」は、次の諸本では「まだ」となっている。若紫(一六二―9、河内本全)、橋姫(一五一一―1、別本横山本、保坂本、麦生本、阿里莫本)。

底本と異同の最も少いのは河内本で、一例の改変、ついで青表紙本系の四例の改変となっている。他はすべて別本である。

いま、「いまだ」に改変された用例を仔細に検討してみるのに、地の文中のものが最も多く、一六例、会話文中のもの五例、心内語中のもの五例となる。会話文の話し手には、源氏、薫、匂宮、時方などの男性をはじめ、大君、常陸守北方、右近などの女性を含み、心内語主体には少将尼も含む。このようにして、改変の結果は、初めに述べたような位相による配慮が、なされていないように見える。それは、「いまだ」から「まだ」への改変にも見られるところである。

ところで、別本の中でも、とりわけ陽明家本は改変が最も多く一例を数え、注目される。池田龜鑑博士は、「この本(陽明家本、筆者注)の特色は別本系統の本が多く、別本はまた古い時代にさかのぼるものが多いので、諸伝本中屈指の重要写本であることは多言を要しない。」¹³とせられる。これに従えば、濫りに理由無き改変が施されたとは考えにくい。このような改変の手が加えられた背後には、「まだ」和文特有語、「いまだ」訓読特有語という平安時代語の位相的制約が、中世以後緩和せられてゆく、という事情が働いているのではあるまいか、¹⁴と思量されるのである。

終りに

以上、青表紙本系飛鳥井雅康筆大島本源氏物語に対する異文といわれるものに着目し、それらの異文が、国語史的に何を語るかを考究してきた。考察に活字本を用いたことは止むを得なかったこととしても、別本の成立、伝来等の性格が明らかでなく、また、中世和文の実態が未だ明らかにされていない現在、この試みが極めて大胆であり、危険率の高い作業であることは、自明である。しかしながら、先学の業績を頼りにすることによって、別本と言われるものの言語的性格の一端を窺い知ることができるのではあるまいか、と愚考したのである。

なお、所論を五項に限ったのは、この作業を進めるに当たっての便宜に従ったまでであることを、付記しておく。

(注)

- 1 『源氏物語大成巻七資料研究篇』七三ページ
- 2 井上親雄「『奉れ給ふ』の用法―諸説より見たる『奉れ』の特性」(比治山女子短大紀要七号、昭和四八年三月)、「宇治十帖における『奉れ給ふ』」(河第五号、昭和四八年六月)
- 3 『源氏物語大成校異篇』のページを示す。 4 注2に同じ。
- 5 池田亀鑑博士によれば、保坂本は、鎌倉中期頃までには写されたといとされる。(注1、二五五ページ)

6 池田亀鑑博士によれば、麦生本と阿里莫本とは同系統とされる。阿里莫本は近世中期頃の書写の由である。(注1、二六二ページ)

7 池田亀鑑博士によれば、横山本は鎌倉中期頃の書写とされる。(注1、二五四ページ)

8 山田巖「院政時代の語法」(岐阜大学研究報告人文科学2号、昭和二九年三月)

小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要特輯号3、昭和四六年三月)一一九ページ以下参照。

9 山田忠雄「誤用・稀用・奇例の処理―今者物語集の語法研究のために―」(国文学解釈と鑑賞、昭和三八年六月)

10 「平安時代の連語の分布」(高知大学学術研究報告一八巻、昭和四四年) 11 「平安時代の漢文訓読語につきての研究」参照。のち、「平安時代語新論」にも述べられた。

12 注11、八一―ページ参照。 13 注1、二四七―ページ参照。

14 平安末期以後の作品のうち、索引の有るものについて、「まだ」「いまだ」の数を調べると次のようになる。棒線の上が「まだ」、下が「いまだ」の数である。松浦宮物語五―五、無名草子四―三、十六夜日記一―三、徒然草〇―一〇、方丈記〇―一、古本説話集一三―三、閑居友一―八、宇治拾遺物語一四―二五、唐物語〇―一、平家物語三―一五五

(付記) 小稿は高知大学国語教育学会(昭51・5・30)において発表されたものである。(文理学部教授)